



大学院医学研究科長・医学部長就任のご挨拶

医学研究科長・医学部長 安田和則



この度、4月1日付けをもって北海道大学大学院医学研究科長・医学部長を拝命いたしました。今後の2年間、北海道大学大学院医学研究科・医学部の運営の責任を担うに当たり、ここに私の所信を述べさせていただきます。

全国の全ての国立大学法人では、法人化への期待の多くが幻想であったと認識させられる一方で、国策に掲げられた科学技術立国構想とは矛盾する運営費交付金と教職員定員の削減が大幅かつ急速に進んでいます。そうした中で北海道大学大学院医学研究科・医学部は否応なく熾烈な大学間競争の中に置かれ、先細人的・経済的環境と老朽化した施設や設備の中で厳しい運営を強いられてきました。しかし本間研一前医学研究科長、浅香正博現病院長のご尽力により、現在、今後の飛躍へ向けた明るい光が見えており、お二人には心から感謝申し上げます。しかし先般行なわれた大学評価等を見ても、危機は未だ完全には回避されていないと言わざるを得ません。私は本間研一前医学研究科長が指導された医学研究科・医学部における改革の方向性と現在進行中の施策を支持し、基本的に踏襲いたします。その上で、その次に来るものを見すえ、構成員の皆様のご意見も十分にお伺いしつつ、私なりのバランス感覚で医学研究科・医学部を運営していきたいと考えております。

まず北海道大学大学院医学研究科・医学部・大学病院に関する私の基本的な認識を述べさせていただきます。人間性と科学性の調和を本質とする医学は、基盤研究と応用研究とが近接して存在し、それらが社会との直接的接点を有する特異な学問領域であります。したがって医学研究科・医学部の使命は研究、教育、そして診療のいずれもが本質的であり、医学研究科・医学部・大学病院はこの本質を具現化するための三位一体の複合体であります。この複合体の中では対立などあってはならず、誤解がないように十分なコミュニケーションが図られる必要があります。一方、時代は変わろうとも不変の大学の

本質はアカデミズムの追求であり、北海道大学大学院医学研究科・医学部・大学病院複合体の使命は生命科学、臨床医学、社会医学における高いレベルの真理の追求と高度な医療の開発や実践を追求することにあります。このアカデミズムを失った大学や大学病院には何の魅力もなく、何者も集まらず、何物も残らないと思います。私は医学研究科・医学部の代表として大学病院と協力し、現実的問題にも十分配慮しつつこのアカデミズムを追及し、臨床医学と基礎医学のバランスや研究・教育・診療の三者のバランスがとれた医学研究科・医学部・大学病院複合体の発展に努力いたします。

研究に関する方針について述べたいと思います。世界をリードする研究の遂行は医学研究科の生命線です。現在の運営費交付金に研究費を期待することはまったくできないため、研究者は競争的資金の獲得を強いられています。医学研究科は研究科構成員のこの努力を、今後も万難を排して支援していきたいと考えます。競争的資金の獲得はそれが大型であればあるほど研究者および事務職員の負担を激増させ、皆が疲弊していくという現実があります。大型競争的資金に対しては医学研究科が人的な研究支援体制を充実させることで、少しでも支援をさせていただきます。現在、連携研究センターを中心に、他部局、他大学間で連携して行なわれている3大研究プロジェクト（「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」、「オール北海道橋渡し研究支援拠点形成プログラム」、「光イメージング研究推進プロジェクト」）は、国から負託された使命の大きさを考えると、これらを成功させねば医学研究科に「次」はないと考えております。まずはこれらを医学研究科における研究施策の柱と位置付け、一層の実質化と発展を図ると共に、新たな大型研究費の獲得に向けて医学研究科を挙げて取り組みます。一方、前述の医学の本質を考えたとき、医学研究科では学問の多様性を認めた堅実な知の探求と時を得た大胆な知の創造とのバランスをとることが必要です。例えば医学研究科へ交付される間接経費は、その一策として今までどおり医学研究科全体の「福祉」へ回すべきであると考えております。

次に教育に対する方針について述べたいと思います。

教育も医学研究科・医学部・大学病院の重大な使命です。明治以来、営々と築かれてきた本邦の隅々まで行き渡る世界最高の医療レベルは、欧米とはまったく異なる教育システムの下で、「崇高な精神的義務」を理解した個々の医師の学習意欲と勉学の努力によって培われてきました。しかるに現在、その事実を無視した国の政策に端を発して、全国の医学研究科・医学部・大学病院では研修医の減少や基礎系および臨床系大学院入学者の減少が進んでおり、それと連動して社会では医療崩壊が音を立てて進行しています。このままでは基礎・臨床を問わずあらゆる医学分野で基盤研究の衰退が起こり、それらは本邦の治療医学のレベル低下を招き、このままでは世界が羨む最高レベルの日本の医療は近い将来に根本から崩壊してしまうであります。そのような事態にならないように、我々は今、全力を挙げてこの時代の奔流に抗して立つ巖とならねばなりません。北海道大学大学院医学研究科・医学部に負託された教育の使命が、将来、大学や基幹病院にあって世界レベルの生命科学、臨床医学、および社会医学研究を遂行できる研究・教育者、あるいは世界レベルの地域医療を担いつつ次世代の医師を教育できる指導医を育てることであることを確認したいと思えます。大学院を魅力あるものにするに関しては、学部と大学院をつなぐMD-PhDコースや、大学院における臨床医学コースが既に始まっており、これを実質化していきたいと考えております。また医学部カリキュラムや講義内容の質の向上を図ることが急務であると認識しており、できることから至急にそれを行なっていきたいと思えます。また大学病院における魅力ある卒後研修プログラムの実施についても、大学病院とよく相談させていただき協力させていただきたいと思えます。卒後研修プログラムに参加する研修医の増加は、入局者の増加や大学院生の増加に繋がると考えます。加えて、教育の原点に立ち返り、種々の機会を通し、医学部学生に対して課せられた使命の存在や高い志を持つことの必要性などを地道に説いていきたいと考えています。

教育制度に関してはさらに、この2年間に2つの大きな変革が予定されており、これらに適切に対応していく必要があります。第一は医学部学生定員増問題です。今年度、医学部では国の要求を入れて5人の学生を増員し、さらに増員を検討しています。ここで重要なことは、医学教育の質を維持することです。それには教員数の増加、運営費交付金の増加、施設の拡充が必須であります。現時点で医学研究科は独自の人件費ポイントを使って新しく新設した教育助教6名を増員して、文科省の予算措置を待っています。しかし政府の対応には樂觀を許さない状況があります。私は、北大が議長を務める全国国立大学医学部長会議と共に、この問題に柔軟かつ適切に対応していきたいと考えております。第二は大括り入試の間

題です。それ自体は悪くない制度ではありますが、この問題は全学教養教育とリンクしており、共通講義やクラス担任などに関して医学研究科・医学部の負担は増える可能性を含んでおります。新しい情報を収集し、北海道大学の全学教育と学部教育に関する過去の変遷の歴史を踏まえて、最善の対処をして参りたいと考えております。

医学部創立90周年記念事業は、同窓会の皆様を始め、ご賛同いただいた多くの個人、団体、企業の皆様のご寄附により、医学研究科・医学部の研究・教育のインフラを支えていただける最重要課題であり、寄附目標達成と本年9月の校友会館「フラテ」の一期工事開始へ全力を挙げて取り組みます。また「フラテ」の第2期工事としての管理棟耐震改修実施を国の施設整備費でやっただくべく、概算要求等に全力を注ぐつもりです。「なぜ100年ではなくて90年なのか。」というご質問を時々承ります。別の機会に改めて詳しくご説明申し上げるつもりでございますが、先に申し上げましたように、90周年を向かえる北海道大学大学院医学研究科・医学部は今、その名誉ある存在を賭けた危機の中にあり、「90周年を乗り越えなければ100周年はない」というところまで追い詰められているから。」というのが私のもっとも短い答えであります。特に医学部学生教育の中心であった第一講堂と第二講堂の老朽化は著しく、国による改修の目処はまったく立ちません。今後、学生用の講義室や自習室、さらには研究上不足しているセミナー室や研究会用の講堂などを動的に整備していく最初の事業として、第一講堂と第二講堂の改修、すなわち校友会館「フラテ」の一期工事が位置づけられます。先に「医学研究科・医学部の研究・教育のインフラ」と申し上げたのはこのような意味からであります。また個人的な思いとしては、同窓会の結束を示す証である同窓会館を持たないのは旧7帝大の中で北大だけであるという事実が、私には残念でなりません。北大医学部は10年後に確かに100周年を迎えますが、私は「ただ存在するだけの北大医学部100周年でいいのか？それとも輝かしい伝統と尊敬を集める北大医学部100周年にするのか？」という危機意識に立って、今、この事業を全力で推進させていただきます。

私自身は浅学非才かつ微力であります。医学研究科・医学部の運営にあたっては、できるだけ多くの先生のご意見をよく聞き、何事にも誠意をもって当たりたいと思えます。私なりの判断を下す必要があるときには、「理」に基づき、「理」を貫きたいと思えます。そして明らかに「理」を欠くような内外からの要求に対しては、敢然と闘う覚悟です。困難な問題に対しては、大学や医学の本来の使命に立ち返って本質を追求し、目先の利益に囚われることなく、また安易な解決に流れることなく、誠意を持って最善の解決を探すつもりです。どうか皆様にはご理解、ご指導、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

副研究科長就任にあたって

腎泌尿器外科学分野 教授 野々村 克也



4年に亘る本間前研究科長による医学研究科の執行部で、後半2年研究科長補佐として医学部教務委員長を務めさせていただきました。元来、泌尿器科学教室を主宰するものとして、教室員の臨床研修や研究指導に四苦八苦していた所に執行部の職務は素直にとっても大変でした。

今年度からは肩の荷が下り、教室運営に専念できると思っていたところ、安田新研究科長の医学研究科医学部に対する熱い想いに共感し、さらに2年間執行部の職務につくことになりました。

平成21年4月からは安田新研究科長の指揮もと、吉岡副研究科長、三輪・有賀両研究科長補佐とともに種々の課題に取り組んでいきます。現在の医学研究科・医学部には90周年事業としてのフラテ会館の設立、入試制度改革や医学部定員増に伴う教育システムの改変、MD-PhDコースの導入や大学院審査制度の改定に見られる大学院制度の実質化など比較的早期に解決すべき問題があります。オール北海道先進医学・医療拠点形成や未来創業・医療イノベーション拠点形成などの大きな研究プロジェ

クトはその着実な推進が不可欠となっております。一方、今年度は多数の定年退職者が予想されており、研究推進パワーの減弱にも注意を払う必要があります。その後横たわる定年延長問題に関しては教員皆様のコンセンサスを得る必要があると思っております。

また、医療情勢の困窮化が医学部に与える影響は臨床に関わるものとして看過できない問題であります。厚生労働省指導による都道府県、研修病院の初期研修医枠の規制は大学病院離れを増長することが懸念されています。このことは、卒業生の大学離れを招き、大学院教育も含む卒後教育研修の学際的後退を意味します。北海道大学医学部の社会的使命が国家試験をパスしただけの応用力のない医師を数多く輩出することではなく、科学的思考をもち医療医学界をリードする臨床医を含めた研究者を育てることにあるとすれば、現在北大が置かれた立場は必ずしも好ましい状況にありません。医学部定員増（文部科学省）や初期研修医枠の規制（厚生労働省）など素直に納得できない医学医療施政に対して我々は逐次検証する姿勢を持ち一丸となって事に当たらなければなりません。

2年の短い期間ではありますが、皆様のご協力をお願い致します。

副研究科長就任挨拶

神経薬理学分野 教授 吉岡 充弘



平成21年4月1日、安田和則研究科長より医学研究科副研究科長の辞令を受けました。これまで本間研一前研究科長のもとで4年間副研究科長を務め、北海道大学をはじめ国立大学が法人化という未知の領域への船出を果たし、取り巻く環境が一層厳しさを増したなかで、私には

荷の重い役割であったことは言うまでもありません。さらに、安田新研究科長から継続して医学研究科運営のお手伝いをするよう依頼されましたが本心、躊躇いたしました。しかし、医学研究科諸氏・先輩の激励もあり、新たに医学研究科の舵取り役となった安田研究科長の様々な用務を一つひとつ、お手伝いし、こなすことができました。

ばと思っております。

これまで教育および入試関連の全学委員会委員あるいはWGメンバーを務める機会を得てきました。現在、全学的な問題として、ある学部では入試倍率が2倍を割り、平均点以下の学生を入学させる状況となっていること。また、それに伴い、大学での教育内容を変更せざるを得ない状況となっています。今後、少子化やいわゆる「ゆとり教育」に伴い、この状況のベクトルは向きを変えることはないと考えられています。このことは「大学の基点は入試にあり」と再考するようになった背景にもなっています。平成23年度より実施が決まっている「大きく入り試制度」が私に科せられた直近の課題です。この期に合わせて、これまでの一般選抜のみならず、特別選抜についても医学部として、未来を見据えた持続可能な成案を出していきたいと考えています。

これまで北海道大学では法人化後の制度整備に向けて鋭意検討が進められてきましたが、組織に関する法的な整備に追われ、実質的な運用方法の検討は未だ先送りされた感は否めません。医学研究科でもこの種の問題が山積しています。しかし、組織の形式上の変化にとらわれる

ことなく、あるべき本来の方向性を見失わぬように細心の注意と大胆な行動が求められています。

医学研究科・医学部の教育研究の改革・発展のために微力ながら努力したいと思っております。

医学研究科長、医学部長退任挨拶

本 間 研 一



平成17年4月から4年間にわたり、医学研究科長、医学部長を務めて参りました。就任当時、医学研究科・医学部には、法人化された国立大学における部局運営、実質的に独立部局となった北大病院との新しい協力関係の構築、大学院教育の実質化、年次進行で実施されていた

研究棟耐震改修工事の継続、設置されたばかりの医歯学総合研究棟の運営、大学執行部指導による部局再編への対応、新医師臨床研修制度による地域医療問題など、課題が山積しておりました。また就任直後からは、予想を大幅に超える運営費交付金の部局配分の削減、耐震改修工事の中断、教職員定員の5%～13.8%削減、ハラスメント問題など、対応に苦慮する難問が続きました。

この難局を切り抜けるために、私はまず執行部を研究科長、副研究科長（2名）、研究科長補佐（2名）、事務部長、総務課長、会計課長の7人体制として、役割の分担を図りました。また、広報活動を活発にし、情報の速やかな伝達に心がけました。一方、新しく医学部創立90周年記念事業を興しました。多くの人から、今なぜ90周年記念なのだと聞かれます。理由はいくつかありましたが、私がかつとも重要視したのは、この事業により医学研究科、医学部構成員の一体感を取りもどすことでした。フラテ祭やフラテ旗、記念写真集や記念誌の発刊もその発想に依っています。

その後、教授会の審議機能の強化、医学研究科・医学部と大学病院のセグメント化、大学院教員組織の再編、教員・技術職員人事制度の改定、予算決算編成機能の強化、間接経費部局分配率の変更、国際連携室、広報室、医学教育支援室の制度化・機能強化、保健診療所と保健

管理センターとの統合再編、など管理運営面での改革、大学院カリキュラムの改訂、大学院入学式・卒業式の実施、教員と学部学生との交流促進、香港大学リカシン医学院との学生交流、北大MD-PhD制度の策定、医学部入学定員増、IT化に対応した図書館機能の見直しなど、教育面での改革、連携研究センター・フラテの設置、附属動物実験施設の改修、未来創薬医療イノベーション拠点形成やオール北海道橋渡し研究拠点形成などの大型研究費の獲得、道内3医育大学との教育研究連携、新しい褒章制度（医学研究科3賞）の制定など、研究面における改革を行ってきました。

私としましては、これらの改革に全力をあげて取り組んできた自負はあります。しかし、主観的な願望はともかく、これらの改革が良かったのか悪かったのかの答えは、5～10年後でなければ得ることはできないかも知れません。この間、安田教授、白土教授、吉岡教授には副研究科長として、小山教授、福島教授、野々村教授、笠原教授には研究科長補佐として、寺山事務長、山下事務部長、下山事務部長、江坂会計課長、仙田課長補佐、奥村総務課長、鹿取総務課長に執行委員としてご協力いただき、大変感謝しております。また、教授会の先生方にはご意見番として、時には温かいご支援を、時には厳しいご批判をいただき、独善に陥る危険性を阻止して頂きました。この場を借りて、お礼申し上げます。

国立大学をめぐる情勢は決して楽観を許しません。しかし、安田新研究科長のかじ取りのもと、医学研究科・医学部が今後大きく発展し、世界に飛翔することを信じて疑いません。最後になりましたが、医学研究科・医学部の皆様に対し、これまでのご支援、ご協力に感謝するとともに、皆様の益々のご健勝を祈念して、私の退任の挨拶といたします。長いこと、ありがとうございました。

定年退職にあたって

眼科学分野 准教授 田 川 義 継



学生時代を含めて40数年間、北海道大学医学研究科・北海道大学病院にお世話になり、ありがとうございます。外国留学の2年間を除き、長きにわたり北海道大学で過ごさせていただきました。この間、私の専門分野である眼科の分野で、臨床部門・研究部門ともに目覚ましい進歩があり、このような時代に大学で仕事を続けることが出来たこと、また多少なりともこの進歩に貢献できたこ

とを大変幸せに感じております。また、医学研究科・北海道大学病院全体の進歩・変革も著しく、特に大学病院の変貌には目を見張るものがあり、病院の巨大化・高度化の流れが定着しつつあります。しかし、これに伴う各診療科間の連携や病院全体の効率化に多くの問題点もあるように感じられます。今後、これらの課題を乗り越えて名実ともに我が国を代表する医学研究科・北海道大学病院として発展されることを祈念致します。最後に、これまでお世話になりました皆様に心よりお礼申し上げ、退職のご挨拶とさせていただきます。

北大医学部90年史ダイジェスト

第4回 新たな飛躍に向けて（1999年～2008年）

北大医学部90年史編集委員会委員

白 土 博 樹
西 村 正 治

<国立大学の独立行政法人化>

1997年12月の行政改革会議の報告に端を発した国立機関の独立行政法人化の議論は、1999年4月の閣議決定を経て、2002年3月には最終報告「新しい『国立大学法人』像について」が公表されるに至った。そして、2004年度より正式に国立大学法人北海道大学が誕生した。この独立法人化の流れは国の財政改革の一端として行われたものであり、国立大学側の自主的な改革でもなければ大学の独立性を求めた成果でもない。しかし、これを契機に大学独自の発展やさらなる改革に向けての機運が高まった。法人化後は予算執行や人事面における大学法人本部の権限が格段に強まった。各研究科に配分される運営費交付金は大幅に削減され、医学研究科・医学部においても予想をはるかに上回る緊縮財政を強いられることとなった。一方、大学法人本部が戦略的人事を行うために、全教員の約5%に相当する全学運用定員分の人件費の負担を各部局に求め、医学研究科・医学部は、2009年度までに教授6名、助教授5名、助手5名に相当する人件費を拠出することになった。

<遺伝子病制御研究所の設置・独立>

前述した法人化に遡る2000年医学部附属癌研究施設と免疫科学研究所との統合による遺伝子病制御研究所の設置・独立が決定した。設置目的は「遺伝子病の制御に関する学理及びその応用の研究」にあり、遺伝子異常、またはその発現異常によって生じる疾患の病因、病態を解明し、その制御法開発を目指すものとされた。

<医学部保健学科の設置と保健科学研究院の設立>

2003年10月それまで3年制であった医療技術短期大学部を廃止・転換して医学部に4年制の保健学科を設置した。続いて、2008年には大学院保健科学研究院が正式に発足した。これに伴い、医学部保健学科5専攻5学科目の4年間の教育を大学院保健科学研究院の教員が担当するという構造になった。

<医学研究科改修工事の流れと医学部会館の新設に向けて>

医学研究科改修工事は、耐震改修という名目のもとに法人化前の2001年から5年間にわたる「国立大学等施設緊急整備5カ年計画」に基づいて始まった。2004年には医歯学総合研究棟が完成し、医・歯学研究科が共同で使用するとともに、流動的に使用可能なオープンラボがあつ

くられた。引き続き、南棟、東南棟の改修が行われたが、国の緊縮財政と耐震度良好という理由により残りの研究等の改修が中断した。そこで、医学研究科として独自に戦略を立て直し、後回しにされそうになった東北研究棟等の改修を国への予算要求によらない手法で断行した。学生サークル室の改修、医学部食堂の移転整備、図書館のバリアフリー化が、教員や父母、同窓生、医学部同窓会や病院協会の寄付や総長裁量経費によって整備したのを皮切りに、東北研究棟と老朽化の激しい附属動物実験施設の一部改修を医学研究科主導で行った。この後、補正予算により北研究棟（2007年度）と中研究棟（2008年度）が無事改修された。さらに、医学部創立90周年を迎える2009年度には図書館耐震改修が計画されており、新時代の図書館機能と講義室を含む学生会館としての機能を併せ持った建物に生まれかわる予定である。加えて、医学部同窓生悲願の「医学部会館（フラテ会館）」新設を立案中であり、その基金とするための同窓生、医学部関係者等に対する募金活動が展開されている。

<大学院大学の変遷>

医学部医学科の大学院大学への改組は1998年よりすでに始まっていたが、2000年4月より6専攻、18大講座（47分野）、8協力講座の枠組みで正式に大学院大学としてスタートした。しかしながら、この専攻、講座、分野の改組は名称がわかりにくく細分化されすぎており必ずしも評判が良いとは言えなかった。そこで、2007年度には学際的融合研究を推進する目的から細分化された6専攻を1専攻に統合した。大学院重点化で複雑化した組織を、生理系4講座、病理系2講座、社会医学系2講座、内科系2講座、外科系2講座、専門医学系4講座、先端医学系1講座の17講座に簡素化した。また、教員人事の弾力化を図り、定員制に代わる「人件費ポイント制」を導入して教員人事の柔軟化を図った。博士課程では、「基盤医学コース」、「社会医学コース」に加えて、臨床研究を遂行できる高度な専門医育成を目的とした「臨床医学コース」を新設した。修士課程にも課程教育コース制を導入し、広い学問背景をもつ医学研究者を育成する「医学専門コース」、医学領域の高度専門職業人を育成する「医科学コース」、公衆衛生分野等における人材を養成する「社会医学コース」を設置した。

<北海道大学病院のあゆみと医師不足の社会問題化>

大学の独立行政法人化に伴って北大病院の独自性も強化された。法人化に先立つ2003年10月にはそれまでの医学部附属病院と歯学部附属病院が統合・改組して、北海道大学病院として再出発した。それまでの科長会は病院運営会議へと名称が変わり、重要決議はそれまでの科長会から病院長、副病院長、病院長補佐等が出席する病院執行会議に移譲した。病院の経営は大学法人全体の運営に直結するため、臨床系教員は否応なく診療により多くの時間を割かざるを得なくなった。これに拍車をかけたのが平成16年度から導入された新卒後臨床研修制度である。医学部卒業生の大学病院離れが進み、従来、大学病院の診療の一端を担っていた卒後初期研修医が著しく減少し、臨床系教員の診療負担はさらに増加した。加えて、この新臨床研修制度の導入を契機に後期研修以降も医師の大学病院離れ、医局離れが加速した。その結果、どこの医局も人手不足となり、関連病院に派遣できる人員にも多大な支障をきたすようになった。すでに21世紀に入って、医療の質・量の高度化、専門化と社会の高齢化による患者数・疾患数の増大のために医師数の絶対的不足が指摘されていたが、新卒後臨床研修制度の導入によって医師の偏在も一気に顕在化した。専門分野別不均衡、地域格差、病院格差、開業医・勤務医間格差等々の偏在である。産科、小児科、救急医療等を担う医師不足、地域医療を担う公的病院の勤務医師不足と疲弊が社会問題化し、「医療崩壊」とも表現される事態を生ずるに至った。患者・医師の信頼関係も崩れ、医療訴訟が増大したこともこの「医療崩壊」に拍車をかけている。このような社会現象は結果として大学院医学研究科にも直接的・間接的に多大な影響を及ぼしつつあり、大学院の定員割れの危機、臨床系教員の研究に費やす時間の深刻な減少をきたし、大学病院本来の高等教育・研究が空洞化する恐れが高まっている。

<大型研究費の獲得と新しい研究組織の構築に向けて>

大学の法人化は大型研究費の獲得においても大きな影響を及ぼしており、全学的・学際的な視点からの北大プロジェクトが求められている。そのため生命科学の医学・医療への出口を担当する研究センターの設置が強く望まれるようになった。2006年東北研究棟改修の際に

は、医学研究科5分野の研究室の他、医学研究支援室、国際連携室、広報室、北海道臨床開発機構事務局、そして560㎡のオープンラボを持つ連携研究センター「フラテ」を設置した。このインフラ整備は、「脳科学研究教育センター」、「未来創薬医療イノベーション拠点形成」、「人獣共通感染症制圧」や「橋渡し拠点形成事業」という大型の外部資金の獲得につながり、2006～2008年にかけて連携分野「光生物学分野」・「放射線生物医学分野」「高機能代替支持組織開発医学分野」「医学物理分野」、寄付講座「分子イメージング講座」・「時間医学講座」が相次いで作られ、全学運用定員を獲得して5年任期の2教授1助教授が純増された。厳しい教育研究行政の中で、外部資金を導入し、戦略的教員再配置の受け皿を作ることは今後益々重要になっていくことだろう。

<教員人事制度の改革とさらなる活性化に向けて>

かつて助教授・助手は「教授の教育研究を助けるもの」と定義されていた。2007年度からは「自ら教育研究を行うもの」と再定義された准教授・助教制が全学的に導入された。医学研究科ではこれらの職位をキャリアパスと位置付け任期制を導入した。2008年度からはさらに新規採用教員はすべて再任なしの5年任期として、その後の業績等の評価により任期なしのテニュアトラックに移行する新制度を定め、教授職にも適応した。全学運用定員制度による競争的教員職の獲得は教育面においても同様であり、臨床系分野の教育負担を軽減するべく2009年度からは教育を担当する助教職の獲得に成功し、教育助教制度を立ち上げる。

<フラテ祭の開催>

本学同窓生や学生の父母、さらには関連企業の方々との結び付きを密にし、医学部・医学研究科における教育・研究・診療の成果や今後の抱負・課題を伝えるための企画として2007年より9月の半日を費やしてフラテ祭が開催されるようになった。研究室・病院・キャンパスツアーなどに引き続き、研究科長や病院長による講演会と参加者全員による懇親会が催されており、今後も同窓生の連携を強める場のひとつとして発展が期待されている。

第6回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムを開催して

2009年3月13日（金）と14日（土）の2日間、本学学術交流会館において、「第6回未来創薬・医療イノベーションシンポジウム」が開催されましたので、ここに紹介させていただきます。

本シンポジウムは、科学技術振興調整費による「未来創薬・医療イノベーション拠点形成事業」の一環として、この事業の成果を広く公表するとともに、幅広い研究者間の交流・討論により更なる研究の発展を目指して開催されており、今回6回目を迎えました。今回は、国内外からも著名な研究者が招かれ、国際シンポジウム“The 6th SYMPOSIUM FOR FUTURE DRUG DISCOVERY AND MEDICAL CARE”として開催されました。本シンポジウムには、180名を超える多数の参加者があり、熱気を帯びた講演と活発な討論がすべて英語で行われました。また、2日目（3月14日）の午後には、医学研究科連携研究センターのシンポジウム（International Symposium of the Research Center for Cooperative Projects）が共同開催として行われ、最先端の脳科学と創薬・イメージングの研究者が活発な交流・討論を行う場が提供されました。これにより各参加者には一層ユニークかつ刺激的なシンポジウムになったと思います。

プログラムの概略を図1に示します。シンポジウムは佐伯浩総長のご挨拶により始まり、その後、サブタイトルの“Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy”にもありますように、分子イメージングと先端医療に焦点を当てながら、最新の創薬に関する講演を加え、創薬と医療・医工学の融合研究、創薬から医療への橋渡し研究についての講演・討論が展開されていきました。

最初のセッション、“Recent Trends in Drug Developments”では、Arbericio F. 先生（Institute for Research in Biomedicine, Barcelona, Spain）と井上登美夫先生（横浜市立大学）がそれぞれ、“The Sea as Source of New Drugs”、“PET/AMS Application for Drug Development”と題して、最新の創薬研究、マイクロドージング等のイメージング技術の創薬への応用に関する研究を紹介されたほか、3演題の研究発表が行われました。第2のセッション（“Molecular Imaging for Regenerative Treatment”）では、Carrió先生（Hospital de Sant Pau, Autonomous University of Barcelona, Barcelona, Spain）が演題を“Neuronal Imaging and its Use for Organ Transplantation”から“New Concepts for Molecular and Functional Imaging of the Heart: Implications for Regenerative Treatments”に変更され、最近注目されて

いる心筋の構造、機能に関する新しいコンセプトとその再生医療・移植医療との関係、分子イメージングの役割について分かりやすく紹介されました。その後、このセッションは、Schwaiger先生（Technische Universität München, Munich, Germany）からの血管新生に関する各種分子イメージングの有用性と個別化医療への応用についての基調講演、北大の研究者からの再生医療に関する研究発表へと続けました。さらに、この後、ポスター発表を囲んでのレセプションが行われました。このポスターセッションでは、北大の若手研究者からの発表を中心に21演題の研究発表があり、ワインと北海道の味覚を楽しみながら和やかな雰囲気の中、活発な研究発表・討論、そして交流が行われました。

2日目（3月14日）には、第3のセッションとして、“Molecular Imaging and Image-Guided Radiotherapy”が行われました。ここでは、Hicks 先生（The Peter MacCallum Cancer Centre, Melbourne, Australia）とLe 先生（Stanford University, Stanford, CA）から、それぞれ“基礎から臨床研究に及ぶ低酸素イメージング研究”、及び“低酸素イメージングの放射線治療への応用に関する研究”が紹介されましたが、講演後も会場の内外でこれらに関する討論が続いており、このテーマに関する参加者の関心の高さが感じられました。さらにこのセッションでは、日立と北大が共同で開発している半導体PET装置に関する演題を中心に、分子イメージング機器・プローブの開発から臨床研究・放射線治療への応用に関する4つの研究発表が行われ、その後、医学研究科連携研究センターのシンポジウムへとバトンタッチされました。

このように、本シンポジウムには、分子イメージングの研究者だけでなく、創薬から医療にわたる幅広い分野の研究者・学生が参加し、国内外、そして北大からも最先端研究の紹介があり、活発な討論と交流が行われたことで、多くの参加者にとって本当に価値のあるシンポジウムであったと思います。これらシンポジウムの内容は、プロシーディング、“Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy and Drug Development”として近々 Springerから出版される予定であることをここにお知らせいたします。なお、次回（第7回）のシンポジウムは、2009年10月7－8日に、今回のシンポジウムと同様、国際シンポジウムとして開催される予定です。多くの方々にご参加いただけることを願っています。

第6回未来創薬・医療イノベーションシンポジウム

世話人一同（文責：久下裕司）

Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy

International Joint Symposium of
“The 6th Symposium for Future Drug Discovery
and Medical Care” and
“Symposium of the Research Center
for Cooperative Projects”



Date **March 13-14, 2009**

Place **University Conference Hall, Hokkaido University**
Kita-8, Nishi-5, Kita-ku, Sapporo, Japan

PROGRAM

March 13 (Friday)

The 6th Symposium for Future Drug Discovery and Medical Care

14:00 Opening Remarks

14:10 **Part 1: Recent Trends in Drug Developments**

Keynote Lectures

- 1) “The Sea as Source of New Drugs”
Prof. Albericio F.
Institute for Research in Biomedicine, Barcelona, Spain
- 2) “PET/AMS Application for Drug Development”
Prof. Inoue T.
Yokohama City University, Yokohama, Japan

☆Regular Presentations

16:20 **Coffee Break**

16:30 **Part 2: Molecular Imaging for Regenerative Treatment**

Keynote Lectures

- 1) “Neuronal Imaging and Its Use for
Organ Transplantation”
Prof. Carrió I.
Hospital de Sant Pau, Autonomous University of Barcelona,
Barcelona, Spain
- 2) “Molecular Imaging of Angiogenesis”
Prof. Schwaiger M.
Technische Universität München, Munich, Germany

☆Regular Presentations

18:30 Reception & Poster Sessions

March 14 (Saturday)

9:00 **Part 3: Molecular Imaging and Image-Guided Radiotherapy**

Keynote Lectures

- 1) “What Does Hypoxia Imaging Using PET Tell Us?
New Insights from Pre-Clinical, Translational and
Human Studies”
Prof. Hicks RJ.
The Peter MacCallum Cancer Centre, Melbourne, Australia
- 2) “Hypoxia Imaging for Image Guided Radiotherapy”
Prof. Le QT.
Stanford University, Stanford, CA

10:00 **Coffee Break**

10:15 ☆Regular Presentations

Symposium of the Research Center for Cooperative Projects

13:00 **Part 4: Lectures**

- 1) “uHTS Chemical Genetics to Identify Novel
Chronotherapeutics”
Prof. Kay S.
University of California, San Diego, CA
- 2) “Cell Death and Autophagy”
Prof. Uchiyama Y.
Juntendo University, Tokyo, Japan

14:40 **Coffee Break**

15:00 **Part 5: Symposium “Brain for the Future”**

- 1) “Bioluminescent Imaging for Assessing
Heterogeneous Cell Functions in the Mammalian
Central Circadian Clock”
Prof. Honma S.
Hokkaido University, Sapporo, Japan
- 2) “Early Postnatal Stress and the Serotonergic
System in the Brain”
Prof. Yoshioka M.
Hokkaido University, Sapporo, Japan
- 3) “Neural Circuit Development and Plasticity
Shaped by Glutamate Transporters”
Prof. Watanabe M.
Hokkaido University, Sapporo, Japan

16:30 **Coffee Break**

16:45 **Part 6: Lecture**

- 1) “Molecular and Functional Imaging
for Drug Development and Elucidation
of Disease Mechanisms”
Prof. Tashiro M.
Tohoku University Sendai, Japan

17:35 Closing Address

主催：北海道大学

実行委員：本岡研一、五十嵐靖之、玉木長良、西村紳一郎、安田和則、門出健次、白土博樹、篠原康郎、久下裕司、吉岡充弘、渡辺雅彦、有川二郎

●事務局：北海道大学医学系事務部総務課 研究科長秘書室

●担当：長崎 菜都子 E-mail:na-saki@med.hokudai.ac.jp Tel (011) 706-5513 Fax (011) 706-7855



連携研究センターシンポジウムを開催して

第3回医学研究科連携研究センターシンポジウムが、3月14日、北海道大学学術交流会館において開催されました。本連携研究センターは平成18年4月に生命科学研究における堅実な知の探求と飛躍的に未来を切り開く大胆な知の創造を追求する組織体制としてスタートいたしました。これまで、各方面と連携して、広い領域の科学技術の成果を医療や健康維持活動分野におけるイノベーションへ発展させる研究活動の取組を行っております。今回はThe 6th SYMPOSIUM FOR FUTURE DRUG DISCOVERY AND MEDICAL CARE (“Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy”)との共同開催とし、国際シンポジウムといたしました。各部門からそれぞれの分野の取組に関する最新の情報提供がなされました。プログラムは以下の通りです。

International Symposium of the Research Center for Cooperative Projects

General Chairperson Dr. M. Tanaka

Opening Address Dr. K. Honma

Lecture 1 S. Kay, University of California, San Diego

“uHTS Chemical Genetics to Identify Novel Chronotherapeutics”

Lecture 2 Y. Uchiyama, Juntendo Univ.

“Cell death and autophagy”

Symposium : Brain for the Future

Dr. S. Honma Hokkaido Univ. Dept. Physiology

“Bioluminescent imaging for assessing heterogeneous cell functions in the mammalian central circadian clock”

Dr. M. Yosioka Hokkaido Univ. Dept. Pharmacology

“Early postnatal stress and the serotonergic system in the brain”

Dr. M. Watanabe Hokkaido Univ. Dept. Anatomy and Embryology

“Neural circuit development and plasticity shaped by glutamate transporters”

Lecture 3 Dr. M. Tashiro, Tohoku University

“Molecular and functional imaging for drug development and elucidation of disease mechanisms”

Closing Address Dr. H. Shirato

本シンポジウムではまず、本間研一連携研究センター長から本連携研究センターの概要とこれまでの取組みが示されました。次いでUCSDのKay博士による講演“uHTS Chemical Genetics to Identify Novel Chronotherapeutics”、そして順天堂大学の内山博士による“Cell death and autophagy”がなされました。後半は、本間さと教授、吉岡教授、渡邊教授によるシンポジウム“Brain for the Future”において、それぞれの部門におけるトピックスの提供がなされました。最後に東北大学の田代博士から“Molecular and functional imaging for drug development and elucidation of disease mechanisms”と題した講演がなされました。

参加者にとって大変有意義な情報が提供され、今後の取組に向けて新たな可能性が示されたシンポジウムとなりました。

第2回オール北海道先進医学・医療拠点形成シンポジウムを終えて

北海道臨床開発機構 特任助教 和田 雅子

医学研究科が札幌医科大学、旭川医科大学とともに進めている「オール北海道先進医学・医療拠点形成」プログラムのシンポジウムが、去る1月30日（金）、13時30分から17時30分の4時間にわたり札幌プリンス国際館パミールで催されましたことを報告します。

第2回目となった今回は、当該プログラムを推進する橋渡し研究拠点「北海道臨床開発機構」（HTR）の、この1年間の成果報告と今後の展望等について発表しました。

当日は、今井浩三・札幌医科大学長の挨拶から始まり、倉崎高明・文部科学省研究振興局研究振興戦略官による挨拶の後で「文部科学省の橋渡し研究の支援事業について」と題してご講演をいただきました。

基調講演では、「橋渡し研究の活動報告」が行われ、HTRの先生方より発表が行われました。白土博樹先生（HTR副機構長／医学研究科教授）は「全体及びシーズ研究の報告」を、永井榮一先生（HTR-TR推進部特任教授）は「TR推進部報告」を、そして佐藤典宏先生（HTR治験管理部／北大病院高度先進医療支援センター副センター長）は「治験管理部報告」を行い、座長を本間研一先生（HTR機構長／医学研究科教授）がつとめました。

次年度から医師主導治験に入るシーズ研究等にむけた支援等々の報告を通して、橋渡し研究組織の基盤整備とシーズ研究支援が着実に進んでいることをHTRの1年間の成果として発表することができました。

当日は特別講演も2題行われました。再生医療分野でご活躍の岡野光夫先生（東京女子医科大学教授／先端生命医科学研究所長）による「再生医療の実現に向けて」（座長：今井浩三・札幌医科大学長）と、黒川達夫先生（千葉大学大学院薬学研究院教授／元厚生労働大臣官房審議官医薬担当）による「今後の医療情勢と医薬品への期待」（座長：小池隆夫・HTR治験管理部長／医学研究科教授）です。各先生のお立場から、日本の再生医療の現状と今後の課題、また医療情勢の現状と今後に向けた医薬品へ



の期待等について2時間に及ぶご講演をいただきました。

シンポジウム全体を通しての質疑応答では、北海道医療大学長の松田一郎先生や、三重大学の珠玖洋先生、神戸の先端医療振興財団の村上雅義先生など、遠方からお越しいただいた先生方からも当プロジェクトに向けた有用なご意見等をいただくことができました。

なお、当日の講演の様子は、HTRが連携を進めている北海道内の医療機関にむけて、Webでのライブ配信も行われました。

シンポジウムは、吉田晃敏・旭川医科大学長の挨拶で無事終了しました。

シンポジウム後には、17時45分から19時15分まで懇親会が和やかに行われ、こちらも沢山の参加者をお迎えすることができました。北海道大学の佐伯浩総長、北海道経済産業局の山本雅史局長、北海道企画振興部の成田一憲部長からは、本プロジェクト及びシンポジウムにむけて祝辞をいただくことができました。

第2回目となる今回のシンポジウムでおおよそ180名のご参加をいただくことができ、懇親会ともに成功裏に終了することができました。ご参加をいただきました先生方にはこの場をお借りしまして、あらためてお礼を申し上げます。



医学研究科・医学部医学科

「優秀研究賞」「優秀教育賞」「優秀論文賞」「特別賞」について

平成17年度に「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰内規」が制定され、昨年度は第4回目の顕彰となりました。この顕彰は「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「優秀論文賞」および「特別賞」の4賞からなり、それぞれ顕著な研究業績をあげた専任教職員、顕著な教育業績をあげた専任教職員、特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等に、そして国内外において顕著な社会貢献をされた方々に対し授与するものです。この顕彰には、様々な難題を抱えた中で法人化への船出を迎え、活力のある医学研究科発展へのきっかけとすべく思いが込められています。すなわち、医学研究科構成員を元気づけるような活発な活動をされている方々の功績を称えることで、医学研究科を活性化していきたいとするものです。

平成20年度受賞者は、優秀研究賞として玉木長良医学分野教授、優秀教育賞として吉岡充弘神経薬理学分野教授に決定いたしました。

<優秀研究賞>

玉木長良氏

「PETを用いた新しい病態評価法の開発と実用化」

玉木教授は京都大学医学部卒（昭和53年）で、1995年9月に北大医学部教授に就任されました。玉木教授は新しい標識薬剤を用いたPETを中心とした分子イメージング法を開発応用し、種々の病態解析、治療効果判定などに応用しました。特に、適切なPET製剤と体内動態解析法を導入し、臓器の局所機能を定量的に解析する手法を導入しました。これにより、動脈硬化の活動性や治療効果判定、悪性腫瘍の病態評価と治療効果の客観的定量的判定、脳や心臓の神経伝達機能解析などについて先駆的論文を創出しました。また、日立製作所と共同で半導体PET装置を開発、動物用試作機から検討を進め、ヒト用の装置の実用化までこぎつけました。

PETを中心とした分子イメージング法の研究を推進するには横断的な研究体制が必須であり、玉木教授は関係する核医学診療科や分子イメージング講座はもちろん、広く基礎医学分野や部局を超えた理工学系や生命医学系分野と協調して、分子イメージングの開発・応用研究を進めてきました。さらには企業とも連携して新しい装置の開発と実用化にも関与しました。特に平成18年度からは北大が最も力を注いできた「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」の医療側の実質上の責任者として、先端生命科学研究院と協調しつつ、光計測法、PETプロ

ブ、半導体PETの開発と先端治療への応用などを進めてきました。

分子イメージングは欧米をはじめ、日本でも大きな研究の柱として大きな研究費が投入され研究の推進が図られています。玉木教授が推進しているPETを用いた分子イメージング研究は、創薬と先端医療への応用に期待されています。とりわけ高精細で定量性の高い機能画像情報から、患者に最適な治療戦略の選択や画像に基づいた放射線治療などへの応用が可能となります。このような情報は21世紀に求められる患者にやさしい個別化医療の導入へと導くものであり、「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」での北大での成果は、今後産学官の連携をさらに強化でき、医薬品や医療機器の開発実用化の促進につなげることができるものです。今後とも、世界をリードする成果を北大から発信し、さらにその結果を臨床応用に結び付けていただきたいと願うものです。

<優秀教育賞>

吉岡充弘氏

「医学教育の先進化、国際化に向けての

斬新な構想と実現化への努力」

吉岡教授は1984年に本学医学部を卒業（60期）し、1997年9月に本学医学部教授に就任しています。吉岡教授は平成17年度以来、教育担当副研究科長として、全学教育、医学専門教育、大学院教育の管理運営に携わってきました。吉岡教授は平成18年度に実施された大学院医学研究科カリキュラム再編の基本構想を策定し、従来6専攻であった博士課程を、基礎臨床社会医学の融合的教育を目指して1専攻とし、新たに独自のカリキュラムをもつ3つのコース、すなわち基盤医学コース、社会医学コース、臨床医学コースを策定しました。特に臨床医学コースは、我が国では遅れているとされる、患者を対象とした臨床研究を担う人材育成を目的とし、大学院生は、最長2年間、学外の医療機関に設置した連携講座において第一線の臨床医学の現場で、大学院科目を履修するものです。これらの新しい大学院カリキュラムの実現は大学院教育の実質化を強力に推進するものと考えられる。

平成19年度に導入された国際連携室の室長として、香港大学リカシン医学院との学生交流協定の締結にあたり、主導的な役割を果たしてきました。また、平成20年度に制度化されたMD-PhDの基本構想を策定しました。先般実施された新臨床研修制度により、大学院生の基礎

医学講座への進学が激減し、その対策として、いくつかの大学では学部の途中で大学院に入る休学型のMD-PhDコースを設けていましたが、進学者は限られていました。吉岡教授は、従来のMD-PhDコースの弱点である休学（あるいは退学）を克服する新しいコースを考案し、実施に移しました。それは、医学部6年次から大学院科目を履修する制度で、大学院進学予定者は、学部を卒業し、医師国家試験を受験してから正式に大学院に進学します。このコースではすでに必要な大学院科目を学部で履修しているため、直ぐに学位論文研究に専念でき、3年短縮修了の可能性が高くなるわけです。さらに、このコースのインセンティブとして、大学院授業料相当分の奨学寄付金、大学院修了後の教員任用の優先権などを付与しました。初年度にあたる平成20年度の入学資格付与試験では、定員5名のうち4名が受験し、合格いたしました。本MD-PhDコースは、北大全学の規定改正を必要

とするものでありましたが、吉岡教授は規定改定にも奔走し、当該コースの実現に貢献しました。この4年間、医学研究科・医学部の教育改革を主導し、大学院教育の実質化、学部教育の先進化、国際化に大きく貢献しました。



医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」を受賞して

医学研究科 病態情報学講座 核医学分野 玉木長良

平成20年度の医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」を受賞しましたのでご報告させていただきます。

私は卒業後数年後から現在に至る30年近くポジトロン断層撮影法（PET）を用いた研究に従事してきました。1995年に北海道大学に招聘していただいた後も、北海道で最初のPETセンターを構築するため奔走しました。その結果、周囲の関係の方々の協力を得てようやく1998年に北大病院と関連病院にそれぞれPETとサイクロトロンを設置し、研究教育をスタートしました。その後の分子イメージング研究の急展開により、この分野に注目が集まり、大型研究プロジェクトも進んでPETに関する研究が大きく展開し、診療にも幅広く利用されるようになりました。

このような潮流の中で、私は教職員と相談を進め、理工学薬学の研究支援を得て、新しい標識薬剤を用いたPETを中心とした分子イメージング法を開発し、種々の病態解析、治療効果判定などに応用しました。特に適切なPET用製剤、体内の動態解析法、さらには臓器の局所機能を定量的に解析する手法を導入しました。これにより動脈硬化の活動性や治療効果判定、悪性腫瘍の病態評価と治療効果の客観的定量的判定、脳や心臓の神経伝達機能解析などについて先駆的研究を創出することができました。

他方、このような研究を発展させるためには産学連携

が不可欠となります。ちょうど北海道大学で進めてきた先端融合領域イノベーション創出拠点形成の「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」の医学側の代表として、日立製作所と共同で半導体PET装置を開発、動物用試作機から検討を進め、ヒト用の装置の実用化までこぎつけることができました。本事業では先端生命科学研究院と協調しつつ、光計測法、PETプローブ、半導体PETの開発と先端治療への応用などを進め、3年間で大きな成果を収めることができました。その結果、厳しい競争の中、晴れて継続課題として選定され、さらに本事業が発展できる土台を築くことに貢献できました。

このような恵まれた環境の中でこのびのびと教育研究を実践できたことは幸せでした。PETや分子イメージングに関係する諸先生方に感謝します。特に独立した核医学教室を立ち上げていただいた故古館正從名誉教授には心から感謝しています。また兄弟講座として支援していただいた宮坂和男名誉教授や白土博樹教授にも深謝します。特に部局を超えた連携研究の重要性を教えてくださいました本間研一前研究科長には心からお礼申し上げます。この優秀研究賞について白土先生から推薦していただき、また賞状を本間先生から直接いただいたことは大切な記憶として心に残したいと思います。最後にこの賞を通して、関連の若手研究者が育っていくことを心から願っています。

医学部創立90周年記念事業募金活動 —第10報—

—募金全体額が4億円を突破しました—

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小 山 司

医学部創立90周年記念事業基金の募金活動についてお知らせします。本年3月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。全体額が4億円を突破しました。これまでにいただいたご理解とご協力に心より御礼申し上げます。

ご承知のように、平成18年9月にスタートした医学部創立90周年記念事業計画の一部が変更されています。詳細につきましては、広報第38号（前号）で本間研一前研究科長から説明があったとおりです。募金活動の変更の要点は、当面の募金目標額を5億円とし、募金期間を1年間延長するということです。また、これまでの個人募金は1口10万円とし、任意の額のご寄附も受け付けておりましたが、本年4月からは1万円単位のご寄附も可能

となっています。

したがって、新たに設定された募金目標額5億円まであと1億円となり、募金期限は平成22年3月末までとなっています。これまでと同様、本事業の趣旨についてより一層のご理解をいただけるよう、幅広い募金活動を展開していく所存です。医学部教職員はもとより同窓生の皆様、学生の父母の皆様、また関係各方面の皆様におかれましては、引き続きご理解とご協力をお願いする次第です。

なお、本号では本年3月末までにご寄附をいただいた教員のご芳名を掲載させていただいております。ご寄附をいただいた教員の皆様に厚く御礼申し上げます。

寄附金納入状況（H21.3.31現在）

寄附金合計				400,441,552円
◎ 教 員		242名 / 438名	(55.3%)	43,440,000円
	(内訳)			
	医学科	専任教員	115名 / 151名	25,090,000円
		特任教員	9名 / 30名	740,000円
	病 院	専任教員	91名 / 174名	11,890,000円
		特任教員	2名 / 5名	300,000円
	保健学科	専任教員	25名 / 78名	5,420,000円
◎ 分 野		2件		1,300,000円
◎ 同門会 (団体)		2件		2,000,000円
◎ 同窓生 (教員は除く)		1155名 / 6010名	(19.2%)	172,291,667円
◎ 学生の父母		113名 / 1434名	(7.9%)	13,799,885円
	(内訳)			
	医学科	90名 / 598名	(15.1%)	11,719,885円
	保健学科	23名 / 836名	(2.8%)	2,080,000円
◎ 大学院生		1件		210,000円
◎ 法人等		210件		161,970,000円
◎ 篤志家 (団体・個人(同門会員を含む))		28件		5,430,000円

教員寄附者のご芳名

(平成 21 年 3 月 31 日現在 敬称略)

医学研究科

教授 秋田 弘俊、有賀 正、有川 二郎、今村 雅寛、
岩崎 喜信、岩永 敏彦、近江谷克裕、大野 重昭、
笠原 正典、神谷 温之、川口 秀明、丸藤 哲、
岸 玲子、久下 裕司、小池 隆夫、小山 司、
近藤 哲、櫻木 範明、佐々木秀直、佐々木文章、
清水 宏、白土 博樹、瀬谷 司、田中 伸哉、
玉木 長良、玉城 英彦、筒井 裕之、寺沢 浩一、
藤堂 省、永井 栄一、西村 正治、野々村克也、
畠山 鎮次、福島 菊郎、福田 諭、藤田 博美、
古川 博之、本間 研一、本間 さと、前沢 政次、
眞島 任史、水上 尚典、三浪 明男、三輪 聡一、
武蔵 学、森本 裕二、安田 和則、山本 有平、
吉岡 充弘、渡邊 雅彦

准教授 秋山 真志、伊東 学、岩永ひろみ、岡本 洋、
折館 伸彦、神山 俊哉、川村 信明、久住 一郎、
工藤 正尊、篠原 信雄、末永 直樹、田川 義継、
田中 淳司、田中 真樹、傳田 健三、飛騨 一利、
平野 聡、蒔田 直昌、松本美佐子、矢部 一郎、
山田 秀人、吉岡 成人

講師 青山 英史、木下 一郎、小谷 善久、七戸 俊明、
高野 廣子、田島 敏広、堤田 新、吉永恵一郎

助教 秋元 秀俊、泉 剛、猪熊 大輔、小山内 努、
大塚 紀幸、押海 裕之、小野寺 伸、鐘ヶ江香久子、
權 赫準、小林 純子、澤村 淳、志賀 哲、
清水 健太、鈴木 友己、武市 紀人、田中 輝明、
棚橋 祐典、富居 一範、中川 伸、中西 一彰、
中村 利仁、新野 正明、西出 真也、橋本 聡一、
深谷 昌弘、古川 洋志、的場光太郎、宮崎 太輔、
山崎美和子、森松 組子、築瀬 晴子、山口 拓、
湯浅 資之、吉岡 英治、吉田 隆行、和田 雅子

助手 中村 秀樹、橋本 聡子

異動者 武田 宏司

退職者 櫻井恒太郎、佐々木 了、佐田 文宏、澤村 大輔、
柴田 雅彦、高山 千利、西江 渉、藤川 恵子、
古田 康、松本真知子

病院

教授 浅香 正博、生駒 一憲、松居 喜郎、松野 吉宏

准教授 加藤 元嗣、佐藤 直樹、椎谷 紀彦、嶋村 剛、
菅原 満、長 和俊、寺江 聡、遠山 晴一

講師 阿部理一郎、渥美 達也、石川 岳彦、井上 猛、
岩崎 倫政、加賀基知三、片岡 昭彦、粕野 繁雄、
神島 保、黒田 敏、齋藤 伸治、佐々木 聡、
澤村 豊、芝木 晃彦、高畑 雅彦、瀧田 恒一、
陳 進輝、中丸 裕爾、髭 修平、樋田 泰浩、
本間 明宏、山田 聡、横式 尚司、吉田 和彦

助教 青柳 哲、秋本 幸子、安部川智浩、石黒 信久、
石森 直樹、伊藤 圭、蝦名 康彦、賀古 勇輝、
片岡 浩、北市 伸義、工藤 興亮、神津 将仁、
齋藤 航、高木 大、沢口 直弘、首藤 聡子、
鈴木 章之、高橋 典彦、高橋 将人、津布久 崇、
寺坂 俊介、藤堂 幸治、中村 高士、中山 若樹、
南場 研一、西 信也、秦 琢磨、原澤 克己、
久野健二郎、廣瀬 茂樹、松尾雄一郎、三井 貴彦、
宮本 正樹、山田 俊、渡部 琢哉

助手 木田 敦知

医員 伊藤 候輝、栗田 紹子、櫻井高太郎、橋本 直樹、
増井 拓哉

退職者 阿部由紀子、夷岡 徳彦、小川 智生、柏村 正明、
北市 雄士、國原 孝、小玉 和郎、小山 明彦、
鈴木 温、鈴木 清護、関堂 充、長田 陽一、
畠山 博充、原林 透、本間 次郎、宮坂 和男、
村下十志文、森田 研、矢野 俊介、山中 啓義

医学部保健学科

教授 石津 明洋、小林 清一、齋藤 健、酒井 正春、
佐川 正、武田 直樹、千葉 仁志、西岡 健、
八田 達夫、福島 順子、松下 通明、松野 一彦、
三神 大世、宮本 顯二、村田 和香、森下 節子、
森山 隆則、山本 徹、良村 貞子

准教授 加藤千恵次、河原田まり子

退職者 上野 武治、大宮司 信、中村仁志夫、武藤真佐子

(「退職者」は、平成 18 年 9 月以降に寄附をした後退職された方)

第51回東医体スキー競技 永久杯獲得の御報告

医学部学友会スキー部 前主将 医学科6年 宜保憲明

第51回東日本医科学学生総合体育大会（東医体）スキー競技が、2009年3月10日から17日にかけて、長野県菅平高原にて開催されました。前回大会までに4連覇を果たしている我々スキー部にとって、今大会は5連覇達成による永久杯（5年連続優勝校に与えられる、返還する必要のない優勝杯）獲得が懸かる大一番でした。

東医体スキー競技は、クロスカンントリー競技3種目（15kmフリー／8kmフリー／4×5kmリレー）とアルペン競技3種目（スーパー大回転／大回転／回転）の計6種目が行われます。各種目30位以内に入った選手にそれぞれ得点が与えられ、その合計得点を大学間で争うこととなります。

今大会の総合成績は以下の通りです。我々北海道大学は、クロスカンントリー競技で大量得点を果たすと共に、



アルペン競技においても旭川医科大学に次ぐ得点を獲得し、ダブルスコアに近い圧倒的勝利にて総合優勝を遂げることができました。

男子 総合成績

順位	大学	クロスカンントリー競技			アルペン競技			合計
		15km Fr	8km Fr	Relay	SG	GS	SL	
優勝	北海道大学	301	275	46	99	76	65	862
2	旭川医科大学	41	52	40	116	122	92	463
3	東北大学	100	118	43	18	20	0	299
4	順天堂大学	23	27	32	52	71	61	266
5	信州大学	30	34	20	40	30	16	170
6	聖マリアンナ医科大学	0	0	0	46	40	40	126

（参加校 33校）

これにより北海道大学は5連覇を達成し、永久杯を獲得することができました。東医体スキー競技における北海道大学の永久杯獲得は、1971年度第14回大会以来となる37年ぶり3度目の快挙です。

これは、全面的に御指導御支援下さったOB・OGの先生方や、昨年度までの4連覇に携わった先輩方、そして各部員を支えて下さった御家族の皆様と共に勝ち取った栄冠だと、強く感じております。

また、大会や合宿に際し、部員の実習や試験等の振り替えを考慮して下さった医学部の先生方にも、心から深く感謝申し上げます。

37年ぶりの永久杯獲得という節目に主将を務めることができ、私自身大変光栄に思います。今大会をもって私は引退となりましたが、来年以降もスキー部が連勝を重ねていくことができるよう、今後はOBとして陰ながらサポートしていきたいと考えています。



お知らせ

◆ フラテ祭2009開催について ◆

医学部フラテ祭実行委員会事務局

フラテ祭2009を、9月20日（日）に開催いたします。

フラテ祭は、平素からご支援をいただいております関係各位と医学部の親睦をさらに深め、医学部の現状を見ていただくことにより今後の抱負や課題を認識していただくための場として、一昨年9月に第一回目を開催いたしました。

今年もその第三回目として、全国の同窓生、学生父母、関連企業および医療関係者の皆様方をお招きします。北大医学部の変化・革新をお伝えしつつ、肩肘張らない楽しい「祭」となるよう、今から準備を進めております。教職員の皆様にも、ご協力およびご参加をお願いいたします。

日 時：9月20日（日） 13：30～19：30

場 所：北海道大学医学部／ファカルティハウス
「エンレイソウ」

第1部 施設・キャンパスツアー 14：00～15：15

●Aコース（医学部施設巡り）

平成16年に竣工した医歯学総合研究棟の法医学剖検室、電子顕微鏡室等の実験施設を中心にご案内します。

●Bコース（北海道大学病院巡り）

北大病院の地下施設（PET・MRI・放射線治療等）、手術室、高度先進医療支援センターを中心にご案内します。

●Cコース（キャンパス巡り）

北大構内全体（ポプラ並木、新渡戸稲造像、モデルバーン、北キャンパス等）をバスでご案内した後、クラーク像、総合博物館、交流プラザ等にお立ち寄りいただきます。

第2部 講演会（医学部・臨床大講堂）15：30～17：00

●北海道大学医学部長 安田 和則

●北海道大学病院長 浅香 正博

●独立行政法人 放射線医学総合研究所

重粒子医科学センター長 辻井 博彦

第3部 フラテ交歓会（ファカルティハウス「エンレイソウ」内・レストラン「エルム」）17：30～

●音羽博次奨学基金授与式

●90周年記念事業基金感謝状贈呈式

●ご挨拶

●祝杯

●祝宴 スライドで振り返る北大医学部90年／クラシック演奏／テーブルスピーチ／北大医学部クイズ／‘都ぞ弥生’合唱

●乾杯

※プログラムの内容は、一部変更になる可能性があります。

◆ 第103回 医師国家試験合格状況 ◆

第103回医師国家試験合格者について、去る3月27日（金）厚生労働省から発表されました。

本学部の合格状況は、受験者96人、合格者90人、合格率93.8%でした。新卒・既卒の内訳等は次のとおりです。

今年度の合格率は新卒・既卒共に全国平均を上回り、全国医学部80学部中25位の結果となりました。

なお、既卒者で合格した方は、平成20年3月卒業者1

名、平成19年3月卒業者3名、平成18年3月卒業者1名、平成14年3月卒業者1名の合計6名でした。

	受験者	合格者	合格率	全国平均合格率
新 卒	88 人	84 人	95.5%	94.8%
既 卒	8 人	6 人	75.0%	54.3%
合 計	96 人	90 人	93.8%	91.0%

◆ 平成21年度 大学院入学状況 ◆

修士課程

専攻名	定員	入学者数
医科学	30	28 (2)

博士課程

専攻名	定員	入学者数
医学	100	80 (5)

() 内は留学生で内数

◆ 平成21年度 医学部医学科入学状況 ◆

平成21年度の北海道大学入学式が去る、4月8日(水)午前10時から札幌コンベンションセンターにおいて、午後2時から医学科入学式が臨床大講堂において挙行されました。

医学科入学式では、初めに新入生を代表して青木佑介さんの入学者宣誓があり、引き続き安田医学部長の告辞、浅香北海道大学病院長の祝辞がありました。

医学科の入学者は100人で、内訳は次のとおりです。

() 内は女子で内数

医学科	試験区分	入学者数		内 訳					
				道内高校出身		左記以外		現役	
	前期日程	84	(17)	47	(9)	37	(8)	24	(7)
	後期日程	16	(3)	10	(1)	6	(2)	13	(1)
	計	100	(20)	57	(10)	43	(10)	37	(8)
	【参考：20年度】	95	(16)	58	(9)	37	(7)	30	(6)

◆ 平成20年度 大学院学位授与状況 ◆

		学位授与数(課程修了者数)			
		6月30日	9月25日	12月25日	3月25日
修士課程	医科学				24
博士課程	病理系				
	内科系	1			
	外科系				
	生体機能学	1			6
	病態制御学			1	32(1)
	高次診断治療学	1	1		14
	癌医学	2	2(1)		2
	脳科学	1			1
	社会医学				7
	計	6	3	1	86

() 内は内数で短縮修了者数

	学位授与数			
	6月30日	9月25日	12月25日	3月25日
論文博士	2	1	3	7

◆ 医学部医学科学士学位記伝達式 ◆

平成21年3月25日（水）午前10時から大学主催の学位記授与式に引き続き、午後1時30分から本学部臨床大講堂において、学士学位記伝達式が挙行されました。

伝達式では、本間前医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、次いで、本間前医学部長の告辞、齋藤医学部同窓会会長の祝辞の後、卒業生を代表して、総代の古西崇寛さんから答辞が読み上げられ、6年間の感謝の意と新たに医師・医学研究者として羽ばたく決意が述べられました。



◆ 平成20年度各種助成の採択状況 ◆

財団法人等名	種別	研究者名	交付金
財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会	研究助成金	清水 宏	2,000,000
財団法人喫煙科学研究財団	平成20年度研究助成	三輪 聡一	4,000,000
		秋田 弘俊	2,000,000
		吉岡 充弘	2,000,000
		別役 智子	5,000,000
		玉木 長良	2,000,000
財団法人武田科学振興財団	一般研究奨励	大場 雄介	2,000,000
	特定研究助成 [I]	安田 和則	50,000,000
財団法人秋山記念生命科学振興財団	一般助成	築山 忠維	1,000,000
		大場 雄介	1,000,000
		岩永 敏彦	1,000,000
	奨励助成	松本 美佐子	1,000,000
		絹川 真太郎	500,000
		西嶋 剣一	500,000
財団法人伊藤医薬学術交流財団	交流助成	堀之内 孝広	500,000
		廣谷 真	200,000
	小西 香苗	200,000	
財団法人伊藤医薬学術交流財団	招聘助成	岸 玲子	300,000
	学会等助成	本間 さと	300,000
		小西 香苗	200,000
財団法人北海道高齢者問題研協会	平成20年度研究事業	前沢 政次	600,000
財団法人日本ワックスマン財団	平成20年度学術奨励研究助成	伊 敏	1,000,000
財団法人杉野目記念会	学会等助成	本間 さと	50,000
公益信託岡本敏記念肺線維症研究基金	研究助成金	別役 智子	1,000,000
財団法人持田記念医学薬学振興財団	研究助成金	大場 雄介	2,000,000
財団法人薬理研究会	研究助成金	堀之内 孝広	800,000
財団法人札幌国際プラザ	コンベンション事業助成	本間 研一	100,000
財団法人先進医薬研究振興財団	萌芽研究助成金	堀之内 孝広	1,000,000
		西原 広史	1,000,000
	一般研究助成金	畠山 鎮次	1,000,000
		小山 司	1,000,000
財団法人内藤記念科学振興財団	奨励金	田中 伸哉	3,000,000
日本医師会	医学研究助成費	前沢 政次	1,500,000
		小谷 善久	1,500,000

財団法人等名	種別	研究者名	交付金
財団法人金原一郎記念医学医療振興財団	基礎医学医療研究助成金	笹井 研	450,000
財団法人大和証券ヘルス財団	調査研究助成	尾崎 倫孝	1,000,000
財団法人上原記念生命科学財団	海外留学助成(ポストドクトラル)	新宮 康栄	4,000,000
	研究奨励金	阿部 理一郎	2,000,000
	海外留学助成(リサーチフェローシップ)	松島 将士	4,000,000
財団法人ヤクルト・バイオサイエンス研究財団	研究助成金	岩永 敏彦	1,500,000
財団法人明治安田厚生事業	健康医科学研究助成	絹川 真太郎	1,000,000
財団法人井上科学振興財団	国際研究会出席旅費援助	笹井 研	150,000
公益信託岩澤えい癌研究助成基金	奨励金給与事業募集	秦 洋郎	100,000
財団法人乙卯研究所	研究助成	畠山 鎮次	800,000
ロート皮膚医学研究基金	研究助成	秋山 真志	2,000,000
日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社	研究奨励金	長谷川 大	1,000,000
京都大学再生医科学研究所	平成21年度共同研究B	若尾 宏	2,000,000
財団法人住友生命社会福祉事業団	海外留学助成金	高畑 雅彦	1,500,000
財団法人日母おぎゃー献金基金	献金補助金	水上 尚典	2,000,000

平成21年3月31日までの採択判明分

広報室便り 9

本間前研究科長の体制のもと、医学研究科に広報室ができてから、2年が経過しました。最初はあまり仕事もなく、のんびりできるかと思っておりましたが、次々といろいろな仕事が増えてきて、いまは毎日大忙しです。御蔭さまで、それぞれ日本語版と英語版のホームページや「概要」の完成、カラー版の「広報」のHPでの公表、HPでのお知らせの充実など、広報のために少しはお役に立てたのではないかと、室員一同振り返っておりますが、皆様から見れば、いろいろ至らぬ点もあるかと存じますが、4月以降は、スタッフや体制も変わることと思いますが、今後とも広報室をよろしく願いいたします。

(白土博樹)

編集後記

広報の39号をお届けいたします。私事ですが、3月を持って北大を退職、古巣の産総研に復帰、これに伴い2年間勤めました広報編集長の仕事を新任の方にバトンタッチいたします。広報は昨年度より年4回に、そして白黒からカラーにするなど次々と新しい試みを進めて参りました。これを支えていただいた編集部員の方々、及び事務の方々にご心より感謝いたします。また新しい試みが定着し、信頼されるメディアに成長することを切望する次第です。最後になりますが、医学研究科の更なるご発展を祈念いたします。

(近江谷克裕)

Home Pageのご案内

医学研究科／医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部医学科

発行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉、白土 博樹、玉城 英彦
佐藤 松治